染を防ぐ方法が見えてくるとの考えからでした。

こうした発想は、登山家ならではと言ってよいかもしれません。最も高くて困難な山を想定してトレーニングを積むことで、平均的な山を難なく登れるようにすることと同じ原理なのです。

ではどのように重油処理が行われるかというと、膜になった重油に苛成ソーダを投入攪拌し、石鹸にして海底に沈めるというものでした。しかし、これで最終的な解決方法と言えるのだろうかという思いは拭えません。また、なぜ洗剤などに含まれる界面活性剤が活用されないのかとの疑問もありましたが、その効果についてよく調べてみると、せいぜい三十分が限度で、その後は水と油が再び分離してしまうことが分かったのです。

そうであれば界面活性剤の性質を高め、水と油を分離させなければすべては解決するのではないか。結局、この着想がもととなって、ナノテクノロジーにより界面活性剤の粒子を細かくさせることに成功。これによって世界で初めて、水中で油を完全に分解させることができる洗濯用洗剤「海へ…」が誕生したのです。

平成十一年に湯島聖堂のフリーマーケットで売り出した「海へ…」は、口コミで徐々に広がり、いまではひと月の出荷数が一万五千本から二万本にまで増え、累計二百万本を超えるロングヒット商品へと育ちました。界面活性剤が使われる商品の約七割が洗濯用洗剤であるだけに、「海へ…」が自然環境保護に繋がる一助になればと願わずにはいられません。

また、私はこれまで多くの方々に自然環境を守ることの大切さをお話ししてきましたが、それに加えて「エコよりもニコのほうが大事」ともお伝えしてきました。ニコとは笑顔のことで、日々穏やかで常に心の在りかが定まっている状態こそ、人間にとっての一番の幸せだと思うからです。

（きむら・まさひろ＝がんこ本舗代表取締役）

道理を信じ、道理を貫いた天野貞祐の生涯

貝塚茂樹

京都帝国大学教授、第三次吉田内閣の文部大臣などを歴任し、戦前・戦後の教育界に大きな足跡を遺した天野貞祐。道徳教育史を研究していた私がその名を知ったのは大学院生の時でした。「修身科」をめぐる議論を再検討する中で天野の著書に出合いました。

以後、私は折に触れて天野の著書や生涯を学び、その誠実さ、気骨ある生き方に心励まされてきました。そして今年四月には、天野の評伝『～道理を信じ、道理に生きる～天野貞祐』（ミネルヴァ日本評伝選）を上梓しました。

特に天野が文部大臣時代に取り組んだ、「正義」や「忍耐」「公徳心」といった人が生きる上で大事な徳目を示す「国民実践要領」の構想や、「修身科」復活の提言は、二〇一五年に「道徳の教科化」などとして実現に至りました。三十年以上前に九十六歳で世を去った天野の精神はいまなお私たちの中に確実に生きています。

天野は一八八四年九月三十日、神奈川県相模原に生まれました。天野家は代々地元の名主総代を務めた名門。天野は非常に教育熱心な家庭の中で育てられ、医者を目指して獨逸学協会学校中学校（以下獨協中学）に進学します。

しかし、中学四年の時に天野の人生を大きく変える出来事が起こります。足を捻挫して休学を余儀なくされ、さらに、静養中に母タネが病気で亡くなってしまうのです。

絶望のどん底に突き落とされた天野は、獨協中学を退学し、しばらく無為な日々を送ります。そのような天野の支えとなったのが、内村鑑三の著書『後世への最大遺物』でした。内村の言葉に「精神革命」を受けた天野は、「一心不乱な勉強家」に変貌して、四年遅れながら獨協中学の五学年に編入を果たすのです。

その後、第一高等学校（以下一高）に進学しますが、四年の遅れが幸いして、九鬼周造や和辻哲郎といった一高の歴史が誇る秀才と同期になります。その中で、天野は切磋琢磨を重ね、新しい世界に眼を開いていったのでした。

辛い挫折体験を経たことも あって、天野はこの頃から教育者として生きたいという思いを強くしていきます。そして、一高の名物教授であった岩元禎より、「教育者を目指すなら哲学を勉強すべきだ」という助言を受けて、一九〇九年、天野は京都帝国大学文学部哲学科へと進学します。

そのように、天野の生涯を豊かにしていったのは、恩師や友人との出会いでした。もちろんそれを可能にしたのは、天野が誰に対しても誠実に向き合う信頼に足る人物だったからに他なりません。京大で出会った西田幾多郎は、天野について「彼は絶対人を裏切らない」と評しています。

京都帝国大学を卒業後、京都帝国大学教授、一高校長、文部大臣など輝かしい経歴を歩みます。しかしその一方で、天野がしばしば自らを「徹底的惨敗者」と称したように、彼が辿った道は決して順風満帆ではありませんでした。

天野は日本が戦争へと突入していこうとする一九三七年に、自らの社会批判論や人生観、教育観を打ち出した「命を賭けた書」である『道理の感覚』を出版します。ところが、個人の自由、教育の自立を擁護し、学校における軍事教練の実施を批判する内容を含んでいたため、右翼の圧力と脅迫に晒され自主的絶版に追い込まれてしまいます。

また、一九五〇年に文部大臣となった天野は、戦後教育の個人主義的風潮の中で、「修身科」復活などの道徳教育振興を推進しました。しかしその提言も「戦前への回帰」などと批判を浴び、実現しませんでした。さらに、「生涯最後の、そして決定的な賭け」として、八十歳で取り組んだ獨協大学の設置と理念の実現も、大学紛争の荒波に翻弄され学長辞任に至ります。天野ほど「辞表」を書いた人間はいないと言えます。

天野は哲学者・教育者として「中庸」という価値を最高のものと信じていました。社会が個人を無視して国家主義に走った時には、個人の主体性を擁護し、個人主義に重きが置かれ、公共心が失われた時には、公の大切さを擁護する。天野はこうした姿勢を貫くことが哲学学徒である自らの使命だと信じていました。

そのため天野は、戦前は保守派から自由主義者として非難され、戦後はリベラル派から国家主義者として排斥されるという、「棘の道」を歩まざるを得ませんでした。しかし、天野はそれを覚悟した上で、自分が信じる道理に生きることを貫きました。

天野は自らの人生観を「道理を信じ、道理に仕え、道理のために力を尽くし、道理の媒介者となること」であると表現しています。それは恩師・内村鑑三が説いた「高尚にして勇気ある生涯」を実現しようとした天野なりの表現であったと思います。

天野の評伝を書き始めた当初は、「天野の名誉回復を主張したい」という気持ちがなかったわけではありません。しかし、天野の生涯を辿るうちに、そうした関心は薄れ、天野が自らを「徹底的惨敗者」と称した思いに素直に向き合いたいという思いが強くなりました。そこから見えてきたのは、「激動の時代」に翻弄されながらも、必死に時代と格闘し続けた天野の姿でした。

「徹底的惨敗者」とは決して敗北宣言ではなく、時代と格闘した者にだけ許される透徹した孤高の境地の表現であったのではないでしょうか。

現代日本では、個人主義が行き過ぎ、人のため、公のために尽くそうという価値観が薄れ、社会を支える基盤が崩壊しつつあります。そのような時代だからこそ、道理を信じ、道理に生きた、天野の生き方に、いま一度真摯に向き合うべきだと思うのです。

（かいづか・しげき＝武蔵野大学教授）

着物スーツ「門」・おでかけ作務衣「樹亜羅」
京都二条
Ichimoku
〒604-0063 京都市中京区二条通油小路東入西大黒町320
最新版「一杢カタログ」無料進呈中
お名前、ご住所、電話番号を明記して頂き、
お電話・ファックス・メールにてご請求ください。
0120-37-4666 FAX:075-256-7733 Mail:mon@ichimoku.co.jp
http://www.monkiara.com 一杢ショップ 検索
（S・3L・4Lサイズ別注対応可能）

※致知随想は投稿欄ではございません。原稿をお寄せいただきましても、掲載はいたしかねますので、予めご了承ください。